

第86回フォーラム

1. 日時：2018年1月31日（水）
2. 場所：TKP 神田ビジネスセンター
3. テーマ：中国の都市・建築・庭園の見方・楽しみ方
4. 講師：高村雅彦氏 法政大学デザイン工学部建築学科 教授
5. 参加人数：21社44名

高村氏講演

皆様の会報誌に1年間にわたり連載をさせて頂きました事、誠に有難うございます。読んでいない方もおられるかも知れませんが、今日聞いて頂ければ大体の事は分かって頂けるのではないかと思います。



中国の都市と建築の見方というのは、実は非常に単純です。先ず、①四角にする。丸ではなくて四角にして、②中心軸を通す。そして、③左右対称に構成させる。最後に、④入れ子型に囲う。入れ子型というのは少し難しい言葉ですけど、ロシアの人形マトリョーシカのようにこの四角がどんどん広がっていく訳です。この原理さえ分かれば、中国の都市や中国の建物、住宅はいずれもこの原理で出来ていますので、容易に理解する事が出来ます。この原理が徹底して貫かれています。ですから、①～④の4つの原理がどういうふうに関、我々の目の前にある都市や建築にあるのかという事を見定めればよいのです。

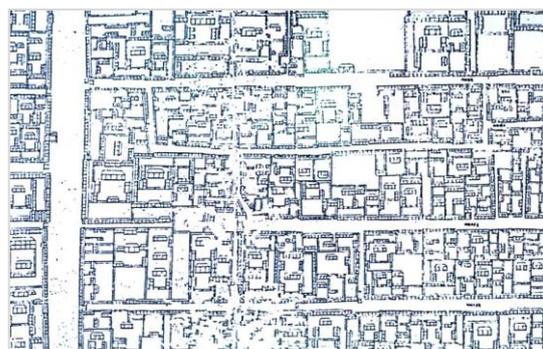
中国の都市と建築の見方

まず、中国の都市と建築の見方をお話しします。皇城という、いまの東京で言う皇居。そこに内城とありますが、モンゴル時代の北京はこれくらいの規模でした。その後、明の時代に外城とって大きなエリアが膨らみます。本当は外城で周りをぐるりと囲む予定だったのですが、資金がなくて南だけになりました。だから今は凸型の都市形態になっていますが、本当は入れ子型にしたかったのです。よって、先ずは四角です。一カ所だけ丸があるのですが、基本的には全てが四角。そして、中心軸が通っていて左右対称に構成されています。紫禁城の裏にある景山から見ると中心軸がビシッと通っています。

北京のような都市だけではなくて、地方都市でもやはり四角に囲っていくという事をしていきます。1229年、今から800年近く前の江南の都市、蘇州の都市図を見ても、やはり役所が真ん中であって入れ子型になっている。中心軸が少しずれていますが、左右対称に基本的な構成にしようとしています。

1750年に北京で描かれた「乾隆京城全図」という都市図がありますが、今でもこれを持って北京の街を歩けます。一棟一棟が全部書かれているのですが、街区もきちっと全部囲って、更に一つ一つの敷地が界牆と言いますが、一つ一つの住宅も壁で囲われています。紫禁城、故宮もやはり大きな中庭が建物で囲われていますし、周辺も塀と建物で構成しながら全部囲うという事をします。

囲い切った最後に一番中心に残るのが、中国という国では玉座です。玉座と言うのは皇帝が座る椅子で、紫禁城にあります。皇帝は一時的に地上世界に降りてきて仕事しているに過ぎないので、あらゆる場所に龍



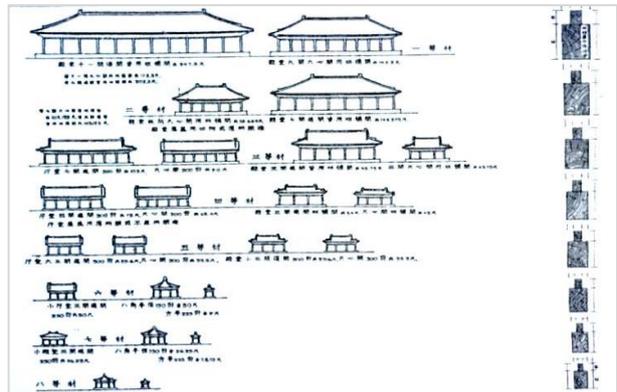
1750年乾隆京城全図

がいます。龍に乗って来て一瞬ここにいる。だから、ここは全中国の中心であるので、そこからずーっと入れ子型に世界が広がっているという概念です。それが様々な歴史書や概念にも書かれています。今から 3000 年くらい前に書かれた『周礼』の『考工記』と言うものに、都市は四角でないといけない。真ん中に支配空間があるという考え方がもう既に書かれています。儒教の教えの中に天円地方っていう考え方がありまして、天は丸く地は四角い。都市は地上にあるので四角でなければいけない訳です。そして、中心軸、左右対称、入れ子型にする。こういう概念が元々あって、中央から外に行くほど位が低くなる。こういう入れ子型の構造。真ん中に玉座があるという。これが概念図です。

広場も同じ概念で見られるか？

皆様ご存知の天安門広場ですが、ここは完全なる儒教的空間を求めて伝統を再生したという事が言えます。1959 年の新中国設立 10 周年記念の時に天安門広場の計画が始まります。片方には人民公会堂、革命記念館が左右に造られて、広場が拡張されていって今の天安門広場が出来ていく訳です。中心軸上にある天安門が見えて、1959 年、反対側には趙冬日と言うアメリカでは非常に有名な当時の中国人建築家によって人民大会堂が設計されました。非常に重厚な建築です。気を付けて見たいのが、柱間なのですが 1・2・3…10・11 間あります。柱間が 11 間。反対側の革命歴史博物館ですが、張開濟と言う当時の非常に有名な建築家によって造られています。こちらも 11 間です。

何故 11 間なのかと言うと、はっきりしているのが 1103 年の建築マニュアル書『营造方式』です。そのマニュアル書には建築の等級が描かれています。それを近代になって梁思成と言う清華大学の教授がきれいに整理し直したのが下図です。等級はどこで測るかと言うと、肘木（ひじき）という屋根を持つ時に肘のように支える木があるのですが、こうやって斗栱（ときょう）と言う組物の所の斗栱の栱の方です。この時代、肘木の断面がどれくらい太いかで建築の等級を表していました。この断面が太ければ太いほど大きな建築を造れるという意味です。風水上偶数間はあまり好まないで奇数間が多いのですが、11 間が最高です。先程の 2 つの建築はいずれも 11 間でしたので、1950 年代に中国で一番良いと思われる一番最大の間数で造られているという事がお分かり頂けたと思います。



— この後も建築に関連するお話が少し続き、その後、今日、高村先生が話したかったという「庭園の見方」と「庭園の楽しみ方」についての紹介となりました。非常に興味深いお話でしたが、少し難しいというより非常に高尚な文化論でした。もう少し早くお話を聞いていればよかったと言う感想が多くありました。

庭園の見方のキーワードは「遠近法」、そして楽しみ方は、詩、つまり漢詩を介した読者と筆者、読者と言うのは詩を読む側で、筆者は作者、この両者の会話。建築で言うと、読者は訪問者です。庭園に掲げられている扁額に記された三文字か四文字。或いは、柱の両側に詩が対になって書かれている対聯。この文字、文章が何時の時代の詩から引用されているのかという事を理解すると、直ぐさま我々の身体は時間と空間を超えてその時代の主人、つまり筆者にアクセスする事が出来るという凄い高度な遊びなのです。

庭園の楽しみ方の詳しい解説を含め、フォーラムの内容については、会報誌「日中建協 NEWS」No.232号（2018年3・4月号）に詳しく記載しています。